

吉蔵の成仏不成仏觀（四）

序

「既に吉蔵の成仏不成仏觀⁽¹⁾」「吉蔵の成仏不成仏觀⁽²⁾」「吉蔵の成仏不成仏觀⁽³⁾」と題して、吉蔵（五四九—六二三）の成仏不成仏觀を論述して来た。その内容は、①五千の増上慢と決定の増上慢は不成仏であるが、②これ以外の常不輕菩薩所対の増上慢を含む他の二乗は全ていづれかは成仏する事、③成仏する為には、一切衆生悉有仏性に相應する正因仏性の上に、更に發菩提心の緣因仏性を満す事、④五千の増上慢等が成仏出来ないのは、これらの二乗にも成仏可能な正因仏性があるにもかかわらず、法華教を信ぜず、緣因仏性である菩提心を發しようとしなからである。

所で奥野光賢氏の「吉蔵の『法華論』の依用をめぐって——特に四種声聞授記を中心に——」⁽⁴⁾の論文中で、私の五千の増上慢等不成仏說に対する否定と思われる内容が提示された。私

末 光 愛 正

の「吉蔵の成仏不成仏觀（三）」の内容は、奥野說に対し答えているものと考えている。但、私の論文は、奥野論文を参照する以前に書いたもので、奥野氏の反論に対応して書いたものでない。この為充分に答える内容となっていない所もある。又私が吉蔵に不成仏說がある事を主張する事により、玄奘（六〇二—六六四）の新訳中の不成仏說の經典に接して、はじめて法相の不成仏說が成立する、と云う横超慧日博士の說と、対立してしまう事にもなる。⁽⁵⁾奥野說に対する不十分な内容を補うとともに、法相以前にどうして三論に不成仏の考えが成立するのかを含め、以下論述する。

一 吉蔵の二說容認に関する補足

まず第一の奥野論文に対する私の反論は、今回考察を試みた四種声聞授記の問題に関しても、吉蔵は二つの相い矛盾する說を認めていたとの印象は筆者にも否めない。しか

し、たとえ相い矛盾する説があったとしても、そのどちらかに本意があるというのが筆者の理解なのである。(奥野註4論文、三八二頁下)

と云う奥野主張は、適切でないと云う事である。奥野氏が、「相い矛盾した二説を認めることが決して自家撞着ではなく吉蔵の思想の特徴の一つ」と云う事を容認し、そのどちらかに本意があると主張するのは、拙論「吉蔵の唯悟為宗について」⁽⁶⁾並びに「吉蔵の無礙無方について」⁽⁷⁾の内容によるが、どちらかに本意があると云う論議は不適切である。

私が、吉蔵において相い矛盾した二説を認める事が自家撞着でないと主張したのは、それぞれそれぞれの立場や場合等により、相い矛盾する諸説等がそれぞれ成立すると云ったのである。例えば、

大品に云わく、菩薩は二諦の中に住して衆生の為に法を説く。有に著する者の為には空を説き、空に著する者の為には有を説くと。(大乘玄論、巻第一、大正蔵四五卷、二三頁上)

と、有に執する機縁に対し空と説き、空に執する機縁に対しては有と説くと云う大品の文を引用している。即ち有と空と云う相い反する二説は、空に執する機縁と有に執する機縁とにそれぞれ説かれるから、有と空の相い矛盾する二説は自家撞着とならないと説いたのである。

先の拙論「吉蔵の唯悟為宗について」「吉蔵の無礙無方に

ついて」或は「吉蔵の索車義について」⁽⁸⁾を論述した大きな目的の一つは、吉蔵が、三車説も四車説ともに認める事が、自家撞着でない事を証明する為であった。即ち菩薩の立場では三車説が、廻小入大の声聞の立場では四車説が成立すると述べたのであり、ただ一つの立場、例えば菩薩の立場において三車も四車も成立すると云ったのではない。この三車四車を例にすれば、

復有_二四句_一、一者權而非_レ実、謂_二二乗也_一、二者実而非_レ權、今日一乗也、三亦權亦実、昔日三中之大乘也、非_レ無_二仏乗道_一故実、但昔説_レ之未_レ尽故權、四非_レ權非_レ実、即是諸法寂滅相不可以言宣、泯_二上三句_一也、(法華玄論、巻第六、大正蔵三四卷、四一二頁中)

と、①權而非実是小乗教、②実而非權は法華の教、③亦權亦実は、法華以前の般若教や維摩教、④非權非実は、中道の教えの事である。この内三番目の亦權亦実とは、般若教や維摩教が真実の教でもあり、又方便の教でもあると云う意味である。即ち、

(前略)、後の二教は並に是れ大乘なり。即ち是れ真実の教なり。但真実の教を籍つて一乗に悟入す。故に真実の教を以て法華に入るの方便とするなり。(法華義疏、巻第七、大正蔵三四卷五二二頁下—五五三頁上)

と、般若と維摩の(後の)二教は、大乘教であるから真実の教である。或は、

華嚴より以後は、此の品の始終の意に依るに、凡そ四教あり。廻小入大の人を調伏し、方に仏慧に入ることを得せしむ。(前同、大正蔵三四卷五五二頁下)

とあるごとく、般若教等は眞実の教であるが、同時に廻小入大の声聞を調伏し一乗に悟入させる為には方便ともなる。即ち般若等は眞実教でもあり又方便教でもあり、或は権でもあり又実でもあるのである。この一つの教が権となったり実となったりする対象が、

三亦漸亦頓、則大品教也、為菩薩說大品、大品於菩薩為頓、(中略)、而命小乘人說於大法、為入一乘方便故、於小乘人名為漸也、(法華遊意、大正蔵三四卷、六四四頁下―六四五頁上)

と、般若教等の大乘の眞実教は菩薩に対応し、又その眞実の教を以て法華に入るの方便ともなる。その方便となる対機が、小乗人、即ち廻小入大の声聞に相応する。

以上の様に一つの般若教が、権であったり実であったりと云う様に、相い矛盾する説がともに成立するのは、菩薩と声聞のそれぞれの立場から主張するのであり、この為吉蔵において三車四車を説く事が矛盾でないと論述したのである。もし吉蔵が、菩薩と声聞に対応させずに、同一立場条件等のみに立って、三車も四車も成立すると云うならば、それはまさに自家撞着であると云う事になる。⁽⁹⁾

吉蔵の成仏不成仏觀(四)(末光)

所で話を奥野説にもどすと、奥野説の「しかし、たとえ相い矛盾する説があったとしても、そのどちらかに本意があるというのが筆者の理解なのである」⁽¹⁰⁾と云う結論は、それぞれそれぞれの立場や場合等を明確に検討論証せずに、断を下した所に不適切であると指摘するのである。奥野氏が、なぜなら、吉蔵の基本的立場は、縁・正二因の仏性導入による法華においての一切皆成仏思想だからである。したがって、この立場からは基本的に「五姓各別」説は認められるわけがないのである。(註4論文、三八〇頁下)

或は、

かかる基本的立場に立つ吉蔵において、「五姓各別」説が容認されるものでないことは容易に推知されるであろう。(註4論文、三八一頁下―三八二頁上)

と、私の五千の増上慢等不成仏説に対し、全く否定と受けとれる内容を主張された一方、「そのどちらかに本意がある」というのが筆者の理解なのである」と云う結論を主張された。奥野氏の云う基本的立場と、私のそうでない立場を明確に区別論証され、その上でどちらの説が本意なのかを論証すべきであったと思われる。そうでなければ、奥野氏は不成仏説を否定しつつ尚且つ両説を認める内容となり、奥野説こそ自家撞着となってしまうからである。

この点に関しては、「吉蔵の成仏不成仏觀(三)」中で論証

したり、又以下論証するごとく、吉蔵は、一切皆成仏思想を正因仏性に対応させた。又一方では、法華を信じ菩提心を発して縁因仏性を満足するかしないかにより、成仏或は不成仏にもなると主張した。この為奥野説は私の云う正因仏性の面に立ってのみ私の不成仏説を否定している事になると思われる。増上慢の成仏と不成仏の二説を容認しながら、五千の増上慢等成仏説が本意と一方的に主張するのは、正に奥野氏の個人的理解であり、吉蔵の本意とは異なる。

二 決定声聞、無発菩提心に関する補足

第二の奥野論文に対する私の反論は、

（前略）作仏するためには基本的条件が必要となる。その条件を吉蔵は、菩提心に求めている。すなわち、菩提心をおこさなければ「五乗同有仏性」といっても作仏することはできないし、逆に菩提心をおこせば五乗の衆生は等しく作仏することができるといのである。引文中で『法華論』を引いて、人天の善根、決定声聞は成仏できないといっていたが、前述した観点に立つならば、人天の善根や決定声聞も菩提心をおこせば成仏することが可能となる、そう理解するのが自然であると思うのである。（奥野註4論文、三七九頁上―下）

と云う奥野主張は、誤りである云う事である。即ち私の説が、五千の増上慢や決定声聞は、縁因仏性である菩提心を発しないが故に不成仏であると云うのに対し、奥野説は、決定

声聞等でも菩提心を発し縁因仏性も満すが故に成仏すると主張されている。もつと厳密に云うならば、奥野氏が「人天の善根や決定声聞も菩提心をおこせば成仏することが可能となる」と主張するまでは私も同じ考えであるが、更に実際に菩提心を起すと考えるのが奥野説であり、それに対し理論としてはそうであるが現実には決定声聞等は菩提心を起こさないと解釈するのが、私の吉蔵に対する理解である。

所で増上慢でも、常不輕菩薩所対の増上慢は、成仏する事は既に述べた⁽¹¹⁾。その理由は、この増上慢は正因仏性と縁因仏性をともに満すからと、吉蔵は考えるからである。即ち、

「深く汝等を敬う」とは、衆生に正因仏性あることを顯す。（中略）

「菩薩道を行ず」とは、縁因仏性を明すなり。仏性ありと雖も、要ず修行を須つて乃ち見ることを得。

「当に作仏を得べし」とは、本と仏性ありて今復た因を行ずれば、縁正の二因の義を具するが故に成仏を得。（法華義疏卷第十、一、常不輕菩薩品第二十、大正蔵三四卷、六一七頁上、並びに拙

論註3論文一一八頁参照）

と、一闡提の増上慢でも一切衆生悉有仏性と云われる正因仏性が備わっている。増上慢の中で常不輕菩薩所対の増上慢のみは、法華一乗の教えを聞き菩薩道を行じ菩提心を発することになるから縁因仏性をも満し、縁正の二因を具備するから成仏すると云うのである。即ち奥野氏の「人天の善根や決定

声聞も菩提心をおこせば成仏すること可能となる」と云う、可能性のみならず実際に菩提心をおこした増上慢の例である。

しかし私も、最初から常不輕菩薩所対の増上慢は、成仏すると論証していたから、今はこの増上慢は問題にはならない。今問題とする増上慢は、五千の増上慢と決定声聞の増上慢で、法華の一乗を聞き菩提心を発し縁因仏性を實際に満足するかしないかが論点である。ところがこの縁因仏性を實際に、決定声聞等がおこすと云う吉蔵の肝心な根拠が、奥野論文には見あたらないのである。即ち、

人天の善根や決定声聞も菩提心をおこせば成仏することが可能となる、そう理解するのが自然であると思うのである。(奥野註4 論文、三七九頁下)

と、「そう理解するのが自然であると思うのである」と云う願望とも思われる根拠や、或は、

(前略)したがって、以上を勘案するならば、根未熟の声聞も菩提心をおこすことによって成仏の道が開かれるという理解が吉蔵にあったものと理解されるのである。(前同、三八〇頁上)

と私見を述べるのみで、実際に根未熟の決定声聞が、根熟して菩提心をおこした根拠となる吉蔵の文の提示がない。

奥野説のまずい点は、五千の増上慢も成仏する等の奥野説立証の根拠となる客観的に確実な文を明示しなかった以上

吉蔵の成仏不成仏観(四)(末光)

に、私の不成仏の根拠とする文を論破もせず、又触れもしなかった点である。私の明示した根拠の文とは、

増上慢も亦爾なり。五千の徒の如きは破と会とを聞くに堪えず。

根未熟なるを以ての故なり。常不輕所対の増上慢は其の根已に熟して破と会とを聞くに堪う。故に為に一乗を説くなり。(拙論註1 論文、二八八頁、並びに法華義疏、卷第八、大正蔵三四卷、五六六頁上)

と、五千の増上慢は「根未熟なる」と述べ、奥野説の様に根熟して菩提心をおこすとは述べていない。根熟して菩提心を発するのは、常不輕所対の増上慢のみである。或は、

五千人の如きは法器の用なくして、能く一乗を聞くと雖も菩提心を発し菩薩行を修して仏業を紹ぐこと能わず。是の故に用なし。(拙論同、二八八頁下、並びに法華義疏、卷第三、大正蔵三四卷、四九三頁下)

と、五千の増上慢は菩提心を発しないと、吉蔵は論述している。奥野氏が五千の増上慢等も成仏すると云う主張をなすならば、少なくとも私の根拠とするこれらの不成仏の文を別解釈しなおすか、或は私のこれらの不成仏の根拠と全く反対の発菩提心の根拠を、吉蔵の註釈疏から提示する必要がある。そうすれば、奥野氏の「たとえ相い矛盾する説があったとしても、そのどちらかに本意があるというのが筆者の理解なのである」と云う説も、検討のしようが出て来る。

特に私が増上慢の中でも、得授記と不得授記、即ち成仏す

ると成仏しないとの三種の増上慢の相違の文を明示したにもかかわらず、奥野氏が触れなかったのも誤りの原因になったと思う。即ち、

増上慢声聞有_二三種人_一、一者亦得_レ聞_レ經亦得_レ授記、如_レ常不輕菩薩為_二増上慢声聞_一說_二法華經_一及為_レ授記、此是未發心授記也、二者不_レ得_レ聞_レ經不_レ得_レ授記、如_レ釈論所_レ出得_二四禪_一者、此人命終墮_二無間獄_一也、三者得_二髣髴聞_一而不_レ得_レ授記、則五千之徒得_レ聞_二略說_一而不_レ得_レ記也、（拙論註1論文、二八七頁下、並びに法華玄論、卷第七、大正藏三四卷、四二二頁下—四二二頁上）

と、①常不輕菩薩所対の増上慢は、法華經を聞き授記を得る、②決定声聞の増上慢は、法華經を聞かないから従って授記も得られない、③五千の増上慢は、法華經を聞く事が出来たが途中退席したため、授記を得られない。即ち三種増上慢中、常不輕所対の増上慢のみ法華の一乗を聞き、菩提心を発し授記され成仏する。しかし決定と五千の増上慢は、法華の教えを聞かず或は信じないが故に、菩提心を発することがないから授記もされず、又不成仏と云う事になる。

吉蔵が増上慢でも、常不輕所対の増上慢の様に成仏すると考えるのは、既に論じたごとく、吉蔵の考えが「根性不定」と云う観点に立っているからである。⁽¹³⁾即ち、

問、今有_二転根義_一不、答、毘曇是小乘尚有_二転根_一、大乘義無_レ有_二定性_一、云何不_レ転耶、值_二惡縁_一故転利為_レ鈍、值_二善縁_一故転鈍為_レ利也、（拙論註1論文二七八頁以下、並びに法華玄論、卷第

五、大正藏三四卷、三九九頁下）

と、大乘の教は、「無有定性」であるから転根を認め、惡縁に会えば利根が鈍根になり、逆に善縁に会えば鈍根が利根へと転根する。常不輕菩薩所対の増上慢は、常不輕菩薩から法華一乗の教えを聞くと云う善縁に会ったからこそ、転根し成仏することになるのである。決定声聞でもこの為、三乗の教えを保執することをやめれば、転根し成仏への道は開ける。即ち、

問う、若し爾らば、決定の声聞の善根は応に菩薩の道に非ざるべきや。答う、決定の人は即ち是れ教を守って小果を封執すれば、即ち破を被って会せず。若し転じて悟れば、即ち会して而も破せざるなり。（法華義疏、卷第八、大正藏三四卷、五六五頁中）

と、決定の声聞と云えども、「根性不定」なるが故に、常不輕菩薩に会い法華の教えを聞くならば転根し、会三帰一の対縁となりうる。とは云え増上慢が転根し成仏する為には、三種の増上慢声聞中で論じたごとく、常不輕菩薩と云う善縁に会わなければならない。これは『法華論』の、

菩薩記者、如_二下不輕菩薩品中示現_一、応_レ知、礼拝讚歎作_二如是言_一、我不_レ輕汝、汝等皆當得_二作仏_一者、示_二現衆生皆有_二仏性_一故、（大正藏二六卷、九頁上）

と云う「皆有仏性」、即ち正因仏性が一切衆生に備っている為、常不輕菩薩が授記するのである。

所で奥野氏が、増上慢等全て成仏すると云う主張をした最大の根拠の一つと思われるのが、『法華論』の、

言「声聞人得授記二者、声聞有四种、一者決定声聞、二者増上慢声聞、三者退菩提心声聞、四者応化声聞、二種声聞如来授記、謂、応化者、退已還發菩提心者、若決定者増上慢者二種声聞、根未熟故不與授記、菩薩與授記者、方便令發菩提心故、

(大正藏二六卷九頁上)

と云う文である。四種声聞中、如来が授記するのは、退菩提心と応化の二声聞で、決定と増上慢の二種声聞は根未熟の故に授記しない。今これから問題となるのが、「菩薩與授記者、方便令發菩提心故」の解釈である。『法華論』のこの菩薩とは常不輕菩薩の事であるから、「方便令發菩提心故」の対機は常不輕菩薩所対の増上慢と云う事になる。この『法華論』の四種声聞に関して、吉蔵は『法華論疏』中で次の様に註釈する。

疑者云、若増上慢声聞、仏不與授記者、不輕菩薩何故通二人与之受記、釈云、仏就根熟未熟故与記不與記、菩薩約二種義故所以与記、一者如前明有仏性故得与授記、二者方便令發菩提心故与授記也、問、若爾仏何故不依此二義通授此四種人記、答、以菩薩例仏義亦得也、(統藏一編七四套二冊百九十九丁右上)

即ち、この吉蔵の註釈によれば、決定声聞も増上慢声聞にも常不輕菩薩は授記するし、又仏も四種声聞全てに授記する

吉蔵の成仏不成仏觀(四)(末光)

と云う内容であると云うのが、奥野氏の主張で、私の不成仏説を否定する根拠である。

私が今まで論述して来たごとく、奥野氏の吉蔵のこの文に対する解釈には、二つの点から誤りだと考える。第一点は、常不輕菩薩が授記するのは、増上慢全てに授記するのではない事である。先に示した三種増上慢で云うならば、「亦得聞經亦得授記」の常不輕菩薩が授記した増上慢だけが成仏するのであり、法華經を聞かない決定の増上慢や、法華經を信じようとしなない五千の増上慢は、法華教を聞かず信ぜざるが故に正因門授記せず、菩提心を發せず、不成仏である。奥野氏が『法華論』の四種声聞の決定と増上慢の二種声聞に対し、一決定声聞、二増上慢声聞——根未熟の故に如来は授記せず、方便して菩提心を發さしむるゆえに菩薩が授記する。(奥野註4論文、三七五頁下)

と、決定と増上慢の全てに実際に常不輕菩薩が授記すると、吉蔵の授記を解釈するのが、第一の誤りである。

第二点は、この吉蔵の『法華論』の文の内容は、後に示すごとく通記である。第一点で論じたごとく常不輕所対の増上慢のみしか、実際には成仏出来ないのが現実とするならば、「不輕菩薩何故通二人与之受記」や「若爾仏何故不依此二義通授此四種人記」とあるごとく、理論面では、全ての増上慢にも授記する事が可能な通記である。先に述べた

ごとく吉蔵は、「根性不定」と云う立場に立つ。無所得空を標榜する吉蔵にあっては、たとえ決定声聞であっても「無有定性」でなければならず、法相の様に「定姓」⁽¹⁵⁾と云う固定的な思想は容認出来ない。現実問題として機縁が法華教を信ぜず菩提心を発しないとしても、道理としては、決定声聞でも「無有定性」であるから、授記され成仏する可能性がなければならぬ。常不輕菩薩が授記するのは、縁因仏性に対する縁因門授記ではなく、通記の正因仏性に対する正因門授記であることは既に論じた。⁽¹⁶⁾即ち常不輕菩薩の正因門授記とは、

正因門授記者、如常不輕菩薩說四衆皆當作仏、然此四衆未⁽¹⁷⁾有⁽¹⁸⁾信一乘心、但身中有⁽¹⁹⁾仏性、必當作仏、法華論釈⁽²⁰⁾常不輕品、一切衆生実有⁽²¹⁾仏性、故當作仏也、（法華玄論、卷第七、大正藏三四卷、四二〇頁中）

と、「但身中有仏性」と云う一切衆生悉有仏性という正因仏性があるから授記する通記なのである。又吉蔵は「常不輕菩薩品」を次の様に註釈する。

五には衆生に悉く仏性ありと説き、一乗の義を成ぜんと欲するが故に此の品を説く。一切衆生は但だ仏性のみあって余の性あることなし。故に但だ一乗のみあって余乗あることなし。（中略）、今明す、此の品には正しく悪人に仏性あるを弁じ、方便品には一毫の善皆仏道を成ずと明す。則ち知んぬ、一切の心あるもの並に仏性あつて皆成仏するなり。問う、此の衆生は是れ何等の悪人ぞ。

答う、小乗を保執して大乘を拒逆する、是れ方等を謗する人な

り。又小を執する人は大乘を信ぜず。大乘に於て信なきは是れ一闡提の人なり、即ち是れ極悪の人に仏性あるの義、涅槃と異なることなし。（法華義疏、卷第十一、大正藏三四卷、六一六頁中）

即ち、この「常不輕菩薩品」を説くのは、増上慢と云えども正因仏性があり、法華の教えを聞き菩提心を発しさえすれば、授記成仏出来る事を示す為である。「保⁽²²⁾執小乗、拒⁽²³⁾逆大乘、是謗⁽²⁴⁾方等」の一闡提の増上慢でも、常不輕菩薩により授記される事を実証することにより、他の決定や五千の増上慢も正因仏性があるのであり、道理としては一切皆成仏なのである。奥野氏が根拠とする吉蔵の『法華論疏』のこの文は、道理としては如来も四種声聞全てに授記出来ると云うのであるが、現実問題としては、授記しようにも「方便品」中の五千の増上慢の様に退席してしまい、⁽¹⁷⁾如来でも成仏させる事の出来ない衆生が存在すると、吉蔵は考えるのである。

以上の二点により、奥野氏の全ての決定や増上慢の声聞も、授記成仏すると云う吉蔵に対する解釈は、誤りであると思う。声聞に限らず、人天でも正因仏性があるものの、「無聞非法」⁽¹⁸⁾の縁因仏性を満足するものでなければ、成仏は出来ない。私が、吉蔵も不成仏を主張する事に気付き、「吉蔵の成仏不成仏觀」をここまで書く切っ掛けとなった文を次に示す。しかも奥野氏もこの部分をもって、私の説に対し反論の根拠としたものである。この為、少々長文であるが、以下記

す。

第四に所授記人門とは、汎く得記の人を論ずるに自ら三種あり。一には凡夫、二には二乗、三には菩薩なり。今此の経には備さに三種の人に記を与う。此の三人は皆仏性あるを以て必ず当に成仏すべし。故に並に之に記することを得。法華論に依らば、声聞に記を授くるを釈する中に四種の声聞あり。一には決定の声聞、二には増上慢の声聞、三には退菩提心の声聞、四には応化の声聞なり。二種の声聞には仏授記を与う。謂く応化の声聞と及び菩提心を退して還って菩提心を発せる者となり。決定と増上慢との二人は、根未だ熟せざるが故に仏授記を与えず。然して決定の声聞は小乗を保執し、増上慢の人は自ら究竟と謂いて作仏を信ぜず。即ち記を与うるに堪えず。亦破執及び会帰の義に堪えず。而も此の経が一切の二乗を会して以て成仏せしむとは、蓋し是れ応に悟るべきの人に対するが故に、此の経を説いて破及び会の義を明すのみ。増上慢も亦爾なり。五千の徒の如きは破と会とを聞くに堪えず。根未熟なるを以ての故なり。常不輕所対の増上慢は其の根已に熟して破と会とを聞くに堪う。故に為に一乗を説くなり。(法華義疏、卷第八、授記品、大正蔵三四卷、五六六頁上)

即ち奥野氏は、この文に對し、

(前略)、しかし、筆者は冒頭の菩薩、二乗そして仏道に入っていない凡夫ですら、皆有仏性で成仏可能であり、したがって授記を得ることができるという記述こそ注意されるべきものであると思う。なぜなら、この記述こそ、この問題に対する吉蔵の基本的な前提条件となっているように思われるからである。そのうえで

吉蔵の成仏不成仏觀(四)(末光)

『法華論』の四種声聞授記に関する問題に言及しているのであるから、その記述も彼の前提条件に基づいて解釈して然るべきであろうと考える。その際、会通の鍵となるものが「根未熟」という表現ではないかと思うのである。その理由は、後述したい。(奥野註4論文、三七八頁下)

と主張する。皆有仏性で皆な成仏可能と考えるのが、吉蔵の基本的条件であることは私も認めるが、「五千の徒の如きは破と会とを聞くに堪えず。根未熟なるを以ての故なり。常不輕所対の増上慢は、其の根已に熟して破と会とを聞くに堪う。故に為に一乗を説くなり。」と云う文等を曲げてまで解釈するのは、客観的な態度ではない。吉蔵は、仏の授記と常不輕菩薩の授記の相異に関して、次の様に述べている。

四者、約授記人凡有二種、一仏授記、二菩薩授記、如常不輕菩薩授記四衆記、問、常不輕既是菩薩、云何乃授記、答、菩薩不得授記却数成仏之記、得授記通記、以一切衆生皆有仏性、又無有余乘、唯一仏乘、然道理推之得授記、乃至凡夫知有仏性一乘者、亦得授記他記也、(法華玄論、卷第七、大正蔵三四卷、四二〇頁下)

即ち、常不輕菩薩が授記するのは、先に論じたごとく「通記」である。「一切衆生皆有仏性」「無有余乘、唯一仏乘」と云うだれにでも正因仏性があり、だれでも成仏可能であると云う「道理」の授記が「通記」である。凡夫でさえも「唯一仏乘」と云う道理が判れば、他に授記出来る通記なのであ

る。常不輕菩薩は道理により通記を授け、増上慢でも成仏出来る例を示したのである。しかし五千の増上慢や決定声聞は、「一切衆生皆有仏性」という様に道理としては授記される事も出来るが、現実には常不輕菩薩からも通記を得る機会がなく、従って発菩提心の縁因仏性を満さず、不成仏と吉蔵は考える。奥野氏が正因門授記と縁因門授記を明確に分離して論じなかった所に、錯誤の発端がある様に思う。

三 吉蔵が不成仏を主張する理由

第三の奥野論文に対する私の反論は、

吉蔵がこうした法華解釈を示す背景には、従来指摘されているように、「諸大乘經典顯道無異」を標榜して教判仏教に立脚しない吉蔵独自の姿勢がある。諸大乘經典を価値的に平等とみなす吉蔵には、慧観等の五時教判において涅槃經が法華經よりも高く位置づけられていたことを批判しなければならぬ必然性があったのである。ために彼は法華經の中に積極的に仏性を認めていたのであった。(中略)かかる基本的立場に立つ吉蔵において、「五姓各別」説が容認されるものでないことは容易に推知されるであろう。(奥野註4論文、三八一頁下―三八二頁上)

と云う奥野論理は、一方的であると云う事である。奥野主張は、吉蔵が諸大乘經典顯道無異と標榜する以上、涅槃經同様に法華教も仏性を説くはずである。故に一切衆生悉有仏性を認めることになる法華教は、全ての衆生に授記し皆成仏説で

なければならぬ。この為不成仏を吉蔵が認める訳がないと云う論理であると思う。奥野氏は「かかる基本的立場」と云う前提を設けているから、この立場が私の云う正因仏性に相当するかぎり、全く誤りとも云えないのかもしれない。

しかしそれでは、吉蔵が諸大乘經典顯道無異と標榜するならば、不成仏を説く大乘經典はどの様に理解、解釈するのであろうか。奥野論法でも諸大乘經典の中に、不成仏を説く大乘經典が含まれると、吉蔵は不成仏も主張することになるはずである。所で吉蔵の時代に、不成仏を説く大乘經典が存在したとか、存在しなかったとかにかかわらず、吉蔵は、不成仏の事を理論として存在する事を認める。

今略して四句を論ぜん。一には縁覺の果人、既に仏に値はず。三界の外に於いて法華經を聞いて、三を廻して一に入る。二には縁覺の因人、及び声聞の三果、三界の内に於いて法華經を聞いて、小を廻して大に入る。三には羅漢の人、若し仏に値うものは、法華經を聞いて界内に道に入る。若し仏に値わざるものは、三界の外に生じて法華經を聞いて方に一乗を受く。四には増上慢の二乗、小を保って大を拒めば、界の内外に於いて並びに一乗に入らず。(中観論疏、卷第八末、大正蔵四二卷、一二八頁中)

①即ち、三界外で一乗に入る。②三界内で一乗に入る。③三界の内、或は三界の外で一乗に入る。④三界の内でも外でも一乗に入らない、の四つの場合分けを示す。この四句の分

け方が、適切かどうかは別としても、吉蔵は、第四番目に不成仏の場合を設けている。吉蔵が、三界の内外でも一乗に入ることの出来ない増上慢の二乗を設け、不成仏の存在を認めるのは、論理の上から認めなければならないからである。

実はこの問題に関しては、「吉蔵の成仏不成仏観（二）」の結言で触れたもので、同時にこれにも答える事になる。結言で触れた内容とは、横超慧日博士の次の文である。

一乗三乗の権実という名を以て知られる中国の思想論争は、唐の初めに玄奘三蔵が印度より帰って新仏典を翻訳して以後俄然仏教界を振起させる大問題となった。それまでの長い歴史の中で、経論の伝訳や義解の進むに依じて学者により種々なる異論の提唱はあったけれども、仏教という教えは何人をもみな菩薩の道に入って仏とならせることを終極の願とするものであって、それが経説の上で保証されているという信念は全階層に浸透していた。（中略）そうした普遍の信念に根拠を与えるものとして、法華経の方便説法による一乗成仏説及び涅槃経の一切衆生悉有仏性及び一闍提成仏説が最大の役割を果たしていたこと疑いない。法華・涅槃の二経を重視する光宅寺法雲や淨影慧遠、天台智顗、嘉祥吉蔵らが代表的な最高指導者の地位を占めていたことが、その事実を端的に物語ると言つてよいであろう。（中略）然るに印度への修学を了えて帰国した唐初の玄奘三蔵が、新しい仏典を訳出し初めるや何とも驚く他ない事実が見出された。それによれば人はみな覺りの可能根源となる無漏種子を平等に具備しているとは言えないために、すべての人が一様に成仏し得るとは言えないとし、涅槃経

吉蔵の成仏不成仏観（四）（末光）

の悉有仏性、闍提成仏説を根底からくつがえす説のあることを知らされた。（後略）（横超慧日「法華経をめぐる仏性論争」『仏教思想史』4、一九八一（昭和五六年）十二月、平楽寺書店、二八頁―二九頁参照）

右の御指摘の内容は、①吉蔵を含む人々は、一切皆成仏説と考えていた事、②玄奘以後、不成仏説が主張された事、③その理由は、玄奘の新訳仏典の中に不成仏説があった為、の三点になるかと思われる。今まで論述して来た「吉蔵の成仏不成仏観」の内容により、吉蔵も不成仏を認める事は了解されたものと思う。もし了解されるならば、①と②は訂正され、③の新訳中の不成仏説により、法相宗が不成仏説を確立したと云う理由は、根拠となくなる。寧ろ私が、吉蔵不成仏説主張を云う為には、吉蔵が何故に新訳をみる以前に、不成仏説を主張したのか、この事を証明しなければならなかった。

何故に吉蔵が、不成仏説を新訳以前に主張したかと云うと、二諦を説き或は得益する教えであるならば、全ての事を認める立場に立つ点があるからである。⁽¹⁹⁾ 得益、即ち成仏するならば全ての事を認める例には、

答う、論には泥洹法宝入るに多門ありと云い、経には受悟不同仏事一に非ずと称す。或は音声に籍つて以て凡を改め、或は默然に由つて以て聖と成る。或は光明に因つて以て俗を出で、或は香飯

を仮つて以て道に入る。故に三業利縁に非ざるなく、六塵皆仏事をなす。（後略）、（法華義疏、卷第一、大正蔵三四卷、四四二頁下）

と、『維摩經』「菩薩行品」⁽²⁰⁾の内容等を経証とし、「三業利縁に非ざるなく、六塵皆仏事をなす」と、あらゆる行為対象が仏事にはかならないと云う内容がある。この様にあらゆることを認める立場に立つならば、成仏だけを認めて不成仏を認めない訳にわいかない。吉蔵が成仏も不成仏も認めるのは、基本的には二諦の思想による。先に示したごとく、

大品に云わく、菩薩は二諦の中に住して衆生の為に法を説く、有に著する者の為には空を説き、空に著する者の為には有を説くと。經論に仏菩薩は皆二諦は是れ教なりと明す。（大乘玄論、第一、大正蔵四五卷、二三頁上）

とある様に、相い矛盾する有と空を認め、有と空の二諦を教と考える。有と空を成仏と不成仏に置き換え、成仏も不成仏も教と考えれば、理解しやすいかと思う。これらの内容について⁽²¹⁾の詳細は、拙論「吉蔵の唯悟為宗について」⁽²²⁾或は「吉蔵の無礙無方について」と重複することになるのでこれらの論文に譲り、今は成仏不成仏觀についての場合を、少し別の注釈文により論ずることにする。

吉蔵が、全ての事を肯定するのは、無相・実相の一法より、一切の教えが出ていると考えるからである。

今明す、無量義とは凡そ二種あり。一には実相の体、限量すべからず。謂く体無量なり。二には実相の一法より一切の教を出だす。謂く用無量なり。此の体用は並に深き所以あり。故に稱して義となす。問う、何を以てか無相の一法広く諸教を生ずと知るや。答う、彼の經に説くが如し。始め華嚴の会より終り法華の前集に竟るまで、若しは大、若しは小、世間と出世間との一切の諸教は、皆無相の一法より出生する所なり。（後略）、（法華義疏、卷第二、大正蔵三四卷、四六七頁下）

即ち、華嚴より法華以前のあらゆる大乘小乗の教えは、全て無相・実相の一法より、出生すると考える。出典の「彼の經」とは、

無量義者、從一法一生、其一法者、即無相也、如是無相、無相不相不相無相、名為實相、（無量義經、大正蔵九卷、三八五頁下）

と、『無量義經』の文を指すと思われる。この『無量義經』を説く意味を、吉蔵は、

又上に無量義經を説くは、謂く一より多を生ず。即ち是れ一法を説くなり。（法華義疏、卷第二、大正蔵三四卷、四六九頁上）

と、一法より多が生ずる根拠を示す為と考えている。この理由により、「從實相一法、出一切教、謂用無量」と云う吉蔵の主張がなされる。この実相の一法の体より出生する方便の用には、諸説が存在する事になる。この為諸説には、相い矛盾する説も存在する事が、当然となる。

答う、正観論に云わく、諸仏或は我と説き、或は無我と説きたまへども、諸法実相の中には我なく非我なしと。又応に諸仏は或は仮と説き、或は非仮と説きたまへども、諸法実相の中には、仮に非ず非仮に非ずとも云うべし。(法華義疏、卷第一、大正蔵三四卷、四五五頁中)

この例から判る様に、吉蔵の「実相の一法」とか体と云うのは、非我非無我、非仮非非仮と云う様に、実相のあり方は無名相、絶言であり、思惟を絶したものと云う意味である。名言を絶した実相の一法より、仮りに名言によって、我とか無我とかと云う諸説を説く。この故に諸説は、実相の一面を説いたものにすぎず、真実そのものでもなければ、絶対的なものでもない。これを誤って自説のみが真実であり絶対であると固執するから、争論が生ずると吉蔵は考える。

しかし実相の一法より出生した不完全な名言によって、自説のみ正しいと絶対視する固執は抜くしかない。先に示したごとく、有に執する者の為には空と説き、又空に執する者の為には有と説き、非有非空の真実のあり方に導く。得益得悟する諸説ならば、全て認めるのは、無所得無執着の実相に衆生を導く為であり、方便の諸説に本意があるのではない。

この仮名方便の用である諸説は、四句に分けられる。中論に云わく、諸法は決定の性なし、仏は無量の方便あり。或は一切実不実等の四句を説くと。亦応に云うべし、法は決定の性なければども、衆生に随うが故に、或は見不見等の四句を説くと。

吉蔵の成仏不成仏観(四)(末光)

(法華義疏、卷第四、大正蔵三四卷、五〇七頁下)

即ち、『中論』の「法品」⁽²³⁾の内容により、衆生の機根に応じて、無量の方便の諸説を、四句に分けると云う。これは、夫れ教を論ずれば、四句には出でず。則ち四句に一切の言教を撰し尽す。(中観論疏、卷第八末、大正蔵四二卷、一二六頁下)と、四句が全ての場合を包括するからである。成仏不成仏の事も、吉蔵は四句に分けられると考える。即ち、法華教を聞いて、①大乘の人がそのまま大乘を信じつづける、②小乗の人が大乘を信ずる様になる。③大乘の人がかえって小乗になつてしまふ。④小乗の人がそのまま小乗にいつづける、の四つである。

問う、何の因縁の故に同じく小乗教を棄くるも、法華を聞くを得て信解するもあり、聞かざるものもありや。答う、四句を具すべし。一には始め大乘を習学し終にも亦大乘を聞く。此の人懸に信ず。二には始め大乘を習い中ごろ斯の意を忘る。故に初め其の為に小を説きしも小稍改まるが故に、終に為に大を説く。此の人は法華を聞いて亦信ず。三には本大乘を学し、而して後に大乘を説くを聞いて便ち退いて小を取る。大品の六十の菩薩羅漢と成るが如し。又涅槃經に自つて仏性ありと聞くと雖も、而も猶羅漢と成る。此を以て之を例するに、法華を聞くも亦羅漢と成るものあるべし。此の如き人は、大を聞いて亦信ずるなり。四には始め小乗を学びて終に大を説くを聞く、此の人多く信を生ぜざるあり。其の小乗を習う日久しきを以て、若し大乘を聞くも其の本心に乖

吉蔵の成仏不成仏觀（四）（末光）

三二八

く。故に信を生ぜざるなり。（法華義疏、卷第三、大正藏三四卷、四九四頁上—中）

この吉蔵の四句分別を、大乘と小乗を大小矢印で示すと、①大↓大、②大↓小↓大、③大↓小↓大、④小↓小であるが、法華教を聞いた場合での例であるから、①大↓大、②小↓大、③大↓小、④小↓小に云うのである。③の法華教を聞いて、大乘の人が小乗になる証明法は、般若経や涅槃経中に、菩薩が羅漢になる経証があるから、法華教でもそういう場合があつて当然である、と云う論理である。論理的であるならば、法華を聞いても、小乗が大乘に転根する②の場合を認めると同時に、小乗がそのまま小乗でいつづける④の場合も認めなければならぬ。実相の一法より出生した諸説を、方便として全て認めるならば、不成仏を説く經典が存在しようがしまいが、論理的要請により、成仏も不成仏も吉蔵は主張しなければならぬ。

言われてみれば、⁽²⁴⁾淨影寺慧遠（五二三—五九二）は理性行性を説き、慧遠の不成仏の考えが、吉蔵に影響した事も考えられる。しかし私は、吉蔵が不成仏を説く主なる理由は、この体用論に依るものと思う。⁽²⁵⁾三論の二諦思想、或は師の興皇寺法朗（五〇七—五八一）の「四句」⁽²⁶⁾の影響、伝承と考える。又体用論の伝承に関して、

妙に二種あり。一には体妙、謂く非一非三言忘慮絶せり。二には

用妙、非三非一、知らず何を以てか之を美めん。昔の三に対せんが為に、強いて歎じて一となす。故に、註法華經に云わく、非三非一、相を尽すを妙となす。非大非小、物を通ずるを法となすなりと。蓋し是れ、什肇の旧宗にして、今の新釈に非ざるなり。

（法華義疏、卷第三、大正藏三四卷、四九四頁下）

と、羅什（三四四—四一三、又は三五〇—四〇九）や僧肇^(追註)（三八四—四一四？）や註法華經を書いた劉虬（四三八—四九五）の継承と述べている。吉蔵が不成仏を認めるのは、論理的要請であり、吉蔵以前からすでに、三論の思想中にあつたと思われる。以上により吉蔵には、論理的に云って、不成仏説がなければならぬのであり、奥野主張は不完全な論法と考える。

結 言

吉蔵が「從^ニ実相一法^一 出^ニ一切教^一」と云う立場にあるかぎり、成仏説も不成仏説も「一切教」の中に含まれ、共に認めなければならぬ。この為、一切衆生皆有仏性と云う成仏説に対しては、正因仏性に相応させ、一切衆生皆成仏を満たした。一方不成仏説に対しては、縁因仏性に相応させ、法華一乗を聞き菩提心を発するかしないかにより、成仏と不成仏が成立すると考えた。五千の増上慢と決定声聞は、法華教を聞かず菩提心を発しないが故に、縁因仏性を満たさず不成仏となる。常不輕菩薩所対の増上慢を含む他の声聞等は、正因

仏性の上に更に縁因仏性をも満たすが故に、成仏する事になる。法華経を聞き信じなければ、成仏出来ない。

吉蔵のこの正因・縁因仏性の考えは、法相の理仏性と行仏性に似ており、⁽²⁷⁾成仏不成仏の内容も共通性がある。従来法相のみ不成仏を説くと考えられていたが、吉蔵にも同じ様な考えがあった事が判った。法相以前に吉蔵が、不成仏説を説く事を証明する必要性が生じ、今回の論証となった。たまたま奥野氏の論文が出、これに答える必要があり、これをも含める形で論じた。奥野説により、私も大変啓発される所があった。ただ私が今持っている知識情報等を総合的に見て、一番筋が通る現時点での仮説であり、更に御批判を願う。

所で吉蔵は、「根性不定」と考えるから決定声聞でも道理としては、成仏可能と考える。その為にも、決定声聞と云えども正因仏性があり、成仏する可能性は持たせる。この点は法相の理性行性と似るのであるが、法相の様に「定姓」と云う考えはない。不成仏と云う定義が、菩薩種姓がない事、即ち吉蔵の云う正因仏性が備っていない事を云うならば、吉蔵は一切皆成仏思想である。吉蔵の云う不成仏は、縁因仏性即ち法相の云う行仏性が、決定声聞等にはない事である。⁽²⁸⁾

今回は「実相の一法より一切の教を出だす」と云う体より用への、出生の内容について論じた。次回は、用から体への収入についての吉蔵の考えを、論述出来ればと考えている。

吉蔵の成仏不成仏観(四)(末光)

註

- (1) 駒沢大学仏教学部研究紀要、第四五号、昭和六二年三月
- (2) 駒沢大学仏教学部論集、第十八号、昭和六二年十月
- (3) 駒沢大学仏教学部研究紀要、第四六号、昭和六三年三月
- (4) 駒沢大学仏教学部論集、第十八号、昭和六二年十月
- (5) 註2の拙論の結論で、今後の問題とした内容である。
- (6) 駒沢大学仏教学部論集、第十五号、昭和五九年十月
- (7) 駒沢大学仏教学部論集、第十六号、昭和六十年十月、又奥野註4論文の註13参照。
- (8) 曹洞宗研究紀要、第十八号、昭和六一年十一月
- (9) ただし吉蔵は、諸説並記するのみの場合がある。例えば拙論註3中で論じた「六、四種授記と階位」の授記である(一二七頁―一三〇頁)。吉蔵は南方旧説と北方論師説の二説に対し、「評曰、皆有二義」と二説認める。これはともに出典がある為である。又出典根拠がそれぞれあり、まだ諸説を会通出来ない場合に、吉蔵がそのまま無理に決定せずに、保留する内容があった様に記憶するが、どこであるか忘失した。
- (10) 奥野註4論文、三八二頁下、又奥野同論の註25には、「筆者よりすれば、物事を多面的角度からみる吉蔵にあっては、相い矛盾する説をとにも容認しているように見えるが、そのいずれかにウェイトをかけているのであり、そこに吉蔵の主張がみられるものと考えている。本稿はまさにそうした方向性を示したかったのである」(三八六頁下)とも述べる。
- (11) 拙論註1「五決定声聞と増上慢声聞」(二八六頁下―二八八頁下)参照。

- (12) 一闍提に關しては、拙論註3「四、吉蔵の一闍提」(一二三頁上—一二四頁下) 参照。
 - (13) 拙論註1「二、根性不定」(二七八頁下—二八〇頁上) 参照。
 - (14) 奥野註4論文(三七五頁下—三七六頁下) 参照。
 - (15) 保坂玉泉「五姓各別と成仏不成仏の問題」駒沢大学研究紀要、第十六号、昭和三三年三月参照。
 - (16) 拙論註3「五、正因門授記と緣因門授記」(一二五頁上—一三七頁下) 参照。
 - (17) 大正藏九卷、七頁上参照。
 - (18) 人天の成仏に關しては、拙論註3「三、人天の成仏」(一二〇頁下—一二三頁上) 参照。
 - (19) 吉蔵が得益得悟する説ならば、全て認める事に關しては、拙論註6「六、唯悟為宗」(二六七頁上—二六八頁下) 参照。
 - (20) 大正藏十四卷、五五三頁中—五五四頁下。
 - (21) 註6
 - (22) 註7
 - (23) 「答曰、諸仏無量方便力、諸法無決定相、為度衆生、或説一切実、或説一切不实、或説一切実不实、或説一切非実非不实」(大正藏三〇卷、二五頁上、卷第三)
 - (24) 本学の吉津宜英教授が、私の「吉蔵の成仏不成仏観(二)」を読まれ、「……実は淨影寺慧遠なども一見涅槃經に基いて、一切衆生悉有仏性を言い、一闍提ですら成仏するように思われますが、よく読むと一闍提は不成仏としているのですね。私は引用関係もあるので、慧遠—基の關係の重要性を考えて
- (25) 吉蔵の二諦思想の淵源は、「撰嶺、興皇よりの相承説であつて、三論學派の傳統的主張であることを意味している」(平井俊榮著『中國般若思想史研究』第三節、約教二諦の根本構造、一吉蔵二諦説成立の背景、四五八頁、春秋社)との指摘あり。
 - (26) 拙論註7「四、四句」「五、四句の朗」(三一〇頁下—三一三頁下) 参照。
 - (27) 拙論註3「七、理仏性・行仏性と正因仏性・緣因仏性」(一三〇頁下—一三三頁上)、又保坂玉泉註15論文、或は横超慧日「法華經をめぐる仏性論争」仏教思想史4、一九八一(昭和五六)年十二月、平樂寺書店の「四、慈恩大師窺基の一乗解釈」(二九頁—三二頁)を参照。
 - (28) 横超註27同論中に、「……法華論の中には趣寂の者及び増上慢は根未熟の故に仏が授記されなかつたとあるけれども、正確に言えば趣寂の者は根未熟の故に授記せられず、増上慢の者は根未熟の故に授記されなかつたと言うべきで、一応その區別を立てずに未の語で両者を兼ねたのに過ぎぬという。これが窺基の説である。……窺基のこの説によれば、菩提心を發した不定種姓の聲聞だけが成仏の授記を受け、決定姓の聲聞即ち大乘の姓なき者は法華經に由ると雖も成仏する如きことは絶対に有り得ないというのであつた」(三一頁—三二頁)と、「決定姓の聲聞即ち大乘の姓なき者」と述べられて

いる。この点に関して又、松本史朗「唯識派の一乗思想について——一乗思想の研究（Ⅱ）」中には、「さて、本項の課題は、小乗から大乘に転向するもの、即ち廻向菩提声聞とは一体何なのか、即ち、彼は声聞の種姓をもつのか、それとも菩薩の種姓をもつのか、ということを究明することであった。もし廻向菩提声聞が声聞の種姓をもつとすれば、三乗各別・声聞不成仏という唯識派の基本的立場が崩れてしまう。従って、廻向菩提声聞とは実は菩薩である。即ち、菩薩の種姓をもつ、」（駒沢大学仏教学部論集、第十三号、昭和五十七年十月、二九七頁等）と、廻向菩提の声聞は、菩薩種姓であると論じられる。この点吉蔵は、全ての衆生に仏性が有る、即ち正因仏性があり、成仏するかしないかは、法華を信ずるかしないかであると考えている。この為横超博士の述べられる「決定姓の声聞即ち大乘の姓なき者は、法華経に由ると雖も成仏する如きことは絶対に有り得ない」という法相の考えとは異なる。即ち吉蔵は決定声聞と云えども法華を聞き信ずれば、成仏出来ると考える。しかしそうであっても五千のごとき増上慢は、法華を信じようとしなが故に、正因門授記も出来ず、この故に菩提心を発して縁因仏性を満足しようがないが故に、成仏の機会がないと考える。

尚蛇足となるが、横超博士によれば、法相は、「……即ち仏は決定声聞に授記されなかったが、菩薩が現に授記しているのではない。窺基はこれに対して、常不菩薩は如何にも授記しておりその対象の中から決定声聞も漏れるものではないけれど……」（註27同論三二頁）と、常不軽所対の増上慢の

中に、決定声聞も含まれると説かれる。しかし吉蔵の場合は、三種人の増上慢の定義からすれば、それぞれ区別すべきである。即ち常不軽菩薩所対の増上慢の中には、五千の増上慢や決定声聞は含むべきではない。もし「得聞経亦得授記」の常不軽所対の増上慢の中にも含むと考えるならば、それはもはや「不得聞経不得授記」「得聞不得授記」の増上慢の定義ではないことになる。

（追註）伊藤隆寿「六朝仏教思想史研究——道の普遍性と空思想の受容——」（『私学研修』第一一〇号、一九八八年七月三三頁等）参照。